〔原著〕 松本歯学 13：57～63, 1987
key words：歯周病患者 ― 主訴 ― 初期治療 ― 統計

歯周病患者の統計的観察
第3報　昭和58～60年における初診時の主訴とその処置についての検討

金山奎二，宇都宮淳，樽井邦博，伊藤茂樹
塩谷清一，斎藤裕史，両川卓司，河谷和彦
呉　中興，北原郷子，小沢嘉彦，太田紀雄

松本歯科大学　歯周治療学講座（主任　太田紀雄 教授）

Statistical Studies on the Patients with Periodontal Diseases
Part 3. The statistical observations of chief complaint in the first visit and their initial preparation in 1983～1985

KEIJI KANAYAMA, ATSUSHI UTSUNOMIYA, KUNIHIRO TARUI
SHIGEKI ITOH, SEIICHI SHIOGAI, HIROSHI SAITOH, TAKUJI RYOKAWA
KAZUHIKO KAWATANI, CHUNG-HSING WU, KYOKO KITAHARA
YOSHIHIKO OZAWA and NORIO OTA

Department of Periodontology, Matsumoto Dental College
(Chief : Prof. N. Ota)

Summary

We investigated the periodontal disease of 252 patients (142 males and 110 females) who visited the periodontics department in the Matsumoto Dental College Hospital, from January 1983 to December 1985. The records of the periodontal patients showed the chief complaint, plaque control score, location of the complaint, Gingival index (GI), plaque index (PI), Calculus Index (CI), mobility, pocket depth, width of attached gingiva, degree of bone loss, the progress of the disease, its initial preparation and other clinical findings.

1. In October 40—50 year-old patients of both sexes were most numerous, and in most cases the chief complaint was unpleasantness.
2. The location of the chief complaint was generally the anterior teeth of both arches, and there were many cases in which the gingival index was 2, the Plaque Index was 1, the Calculus Index was 1, and mobility was 1.
3. The plaque control score at the first visit was 61—65％ and the state of oral hygiene was bad.

（1986年11月1日受理）

4. Cases in which the pocket depth was 3.0 mm and the width of the attached gingiva was 2.6—3.0 mm were numerous.
5. Almost all of the patients visited the clinic with diseases in the mild stage.
6. Besides scaling and brushing instruction, temporary splint by wire and resin ligature were the most commonly used methods of periodontal treatment.

緒　言

第一報[1]，第二報[2]において我々は歯周病患者がどのような状態で来院するかを把握する為，昭和53年1月より昭和57年12月までの間に来院した患者の初診時における主訴，初診時P.C.R.，主訴部位及びその部位における臨床所見としてのG.I.，P.I.，C.I.，動揺度，ポケットの深さ，付着歯肉の幅，骨吸収度，臨床分類における進行度及び初期治療としての処置内容について比較検討した．その結果，第一報[1]と第二報[2]では年齢，来院月，主訴初診時P.C.R.，P.I.，付着歯肉の幅，動揺度，臨床分類における進行度の分布において異なった成績となったが，その他の項目，主訴部位では上下顎前歯部，G.I.は3，CI.は2，ポケットの深さは4.0 mm，骨吸収度は46～50%，初期治療としての処置内容では歯石除去，刷掃指導を除いては暫間固定で40歳代が最も多かったという成績となった．今回は更に昭和58年1月より昭和60年12月までの間に来院した患者について同様の方法を用いて統計的観察を行い，さらに昭和53年～60年までの総括を行ったので報告する．

資料及び研究方法

1　資料

昭和58年1月より昭和60年12月までの間に松本歯科大学病院歯周病科に来院した患者のうち資料のほぼ整っている男性142名，女性110名の合計252名を対象とした．

2　研究方法

当科では初診時の診査手順として，歯周チャート用紙（記録用紙）に診査内容を記入し，又，質問表に記入してもらっているが，今回も記録された歯周チャート用紙において，来院月，年齢，主訴，初診時P.C.R.はO'Leary[3]，主訴部位とその部位における臨床所見としてのG.I.はLöe[4]，P.I.はSilnessとLöe[5]，C.I.はGreenとVermillion[6]，動揺度，ポケットの深さ，付着歯肉の幅，骨吸収はScheiら[7]の骨吸収メジャー測定法，臨床分類による進行度，及び初期治療としての処置内容について比較検討した．

結　果

1　来院歯周病患者の月別分布に関して

来院患者は10月が最も多く51名(20.2%)(図1)で男性が25名（9.9%），女性が26名（10.3%）であった．

又，年齢との関係をみると男性では30歳代（13.5%）女性では50歳代（19.2%）が多く，男女合わせると50歳代（26.9%）が最も多かった．

2　年齢別分布に関して

来院患者のうち最も多かったのは40歳代の70名（27.8%）（図2）であり，男性40名（15.9%），女性30名（11.9%）となる．

3　主訴別分布に関して

主訴について最も多かったのは違和感の97名（38.5%）（図3）で男性58名（23.0%），女性39名（15.5%）となり，年齢についてみると男性では40歳代（15.1%）女性では30歳代（12.9%）が多く男女合わせると30歳代（26.9%）が多かった．

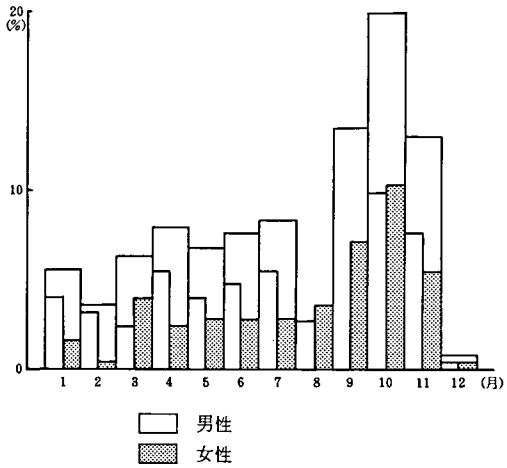

Fig. 1. Distribution of first visit month

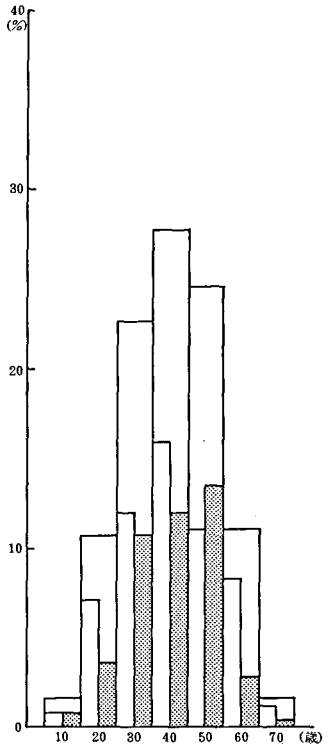

Fig. 2. Distribution of age

4　初診時 P.C.R.の分布に関して

初診時 P.C.R.については P.C.R.61～65%が最も多く27名（10.7%）（図4）で男性16名（6.3%），女性11名（4.4%）となった．年齢では男性が40歳代（20.0%），女性では50歳代（16.0%）に多く，男女合わせると40歳代（28.0%）に多かった．

5　主訴部位の分布に関して

主訴部位で最も多かったのは下顎前歯部の27名（10.7%）で男性が15名（6.0%），女性が12名（4.7%）となった．年齢についてみると男性では40歳代（22.2%），女性では50歳代（18.5%）に多く，男女合わせると50歳代(37.0%)が最も多かった．

6　G.I.の分布に関して

主訴部位における G.I.では G.I. 2 が最も多く，81名（41.5%）（図5）で男性47名（24.1%），女性34名（17.4%）となり，年齢についてみると男性では40歳代(15.7%)，女性では50歳代(15.7%)に多く，男女合わせると30歳代(28.9%)に多かった．

7　P.I.の分布に関して

主訴部位の P.I.では P.I. 1 が最も多く79名（42.5%）（図6）で男性32名（17.2%），女性47名(25.3%)となり，年齢では男性50歳代(18.0%)，女性40歳代（14.0%）が多く，男女合わせると30

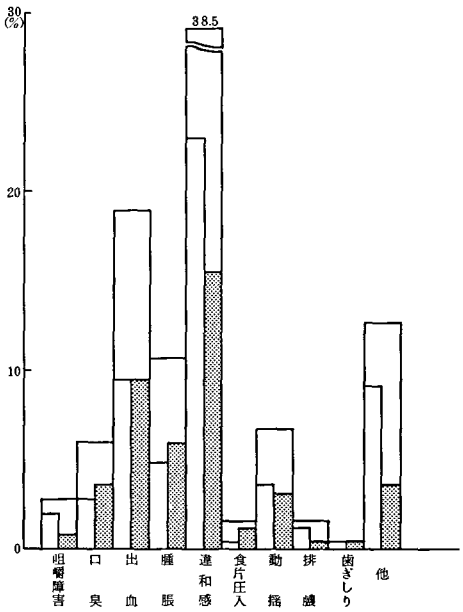

Fig. 3. Distribution of chief complaint

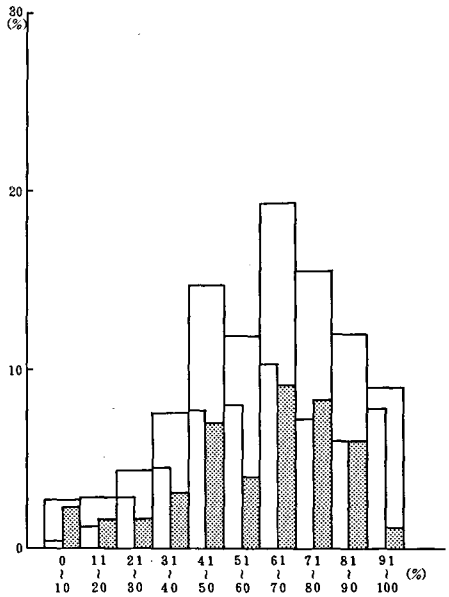

Fig. 4. Distribution of P. C. R.

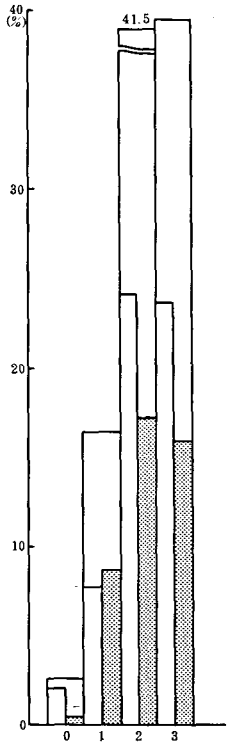

Fig. 5. Distribution of gingival index

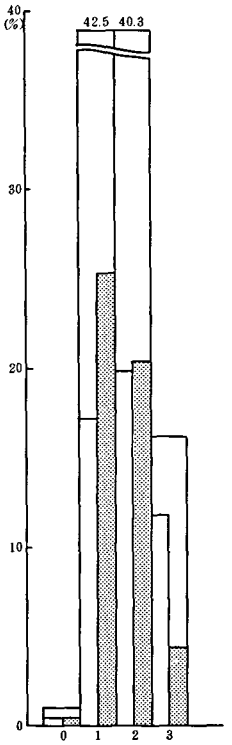

Fig. 6. Distribution of plaque index

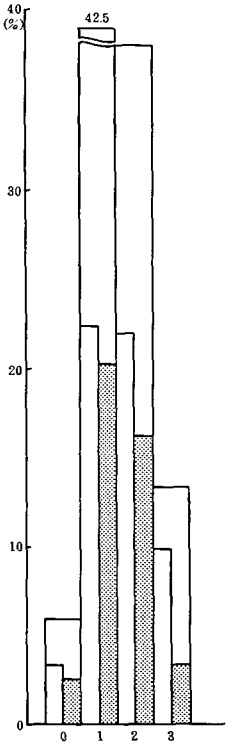

Fig. 7. Distribution of calculus index

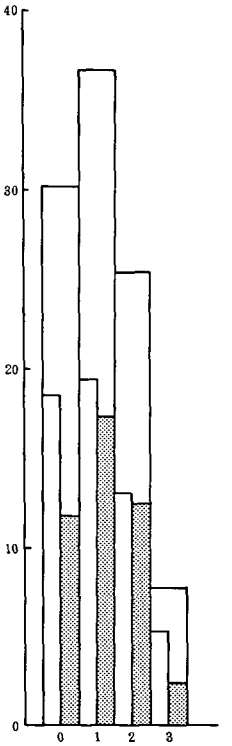

Fig. 8. Distribution of mobility

歳代，40歳代が共に26.0%で最も多かった．

8　C.I.の分布に関して

主訴部位のC.I.についてはC.I. 1が最も多く99名（42.5%）（図7）で男性52名（22.3%），女性47名（20.2%）となり，年齢では男性30歳代と50歳代の11.9%，女性も同じく30歳代と50歳代の14.9%となり男女合わせると30歳代，50歳代が26.8%と最も多かった．

9　動揺度の分布に関して

主訴部位の動揺度では動揺度1が最も多く91名（36.7%）（図8）で男性48名（19.4%），女性43名（17.3%）となった．年齢についてみると男性では40歳代（16.3%），女性では50歳代（16.3%）となり男女合わせると40歳代（28.8%）が多かった．

10　ポケットの深さの分布に関して

主訴部位のポケットの深さは3.0 mmが最も多く57名（23.0%）（図9）で男性30名（12.1%），女性27名（10.9%）となり，年齢では男性40歳代

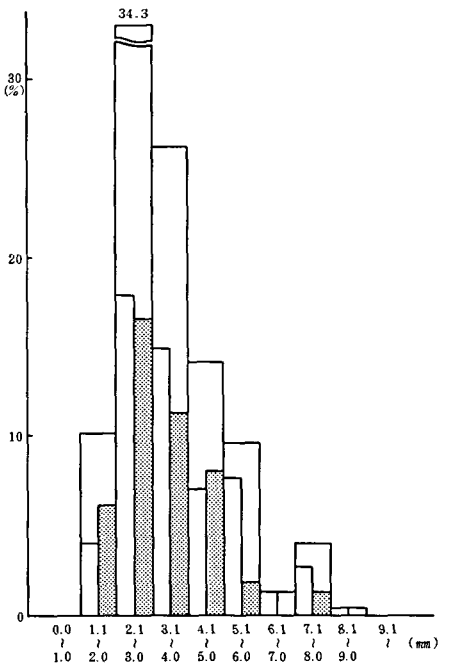

Fig. 9. Distribution pocket depth

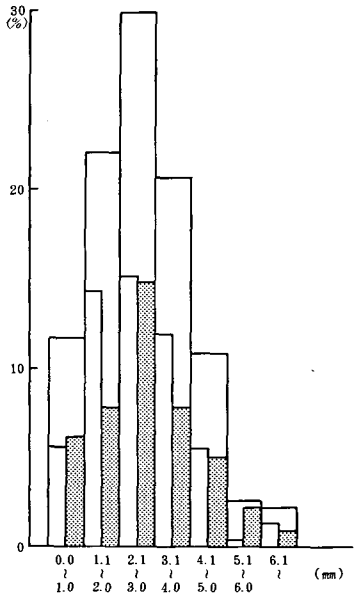

Fig. 10. Distribution of attached gingiva

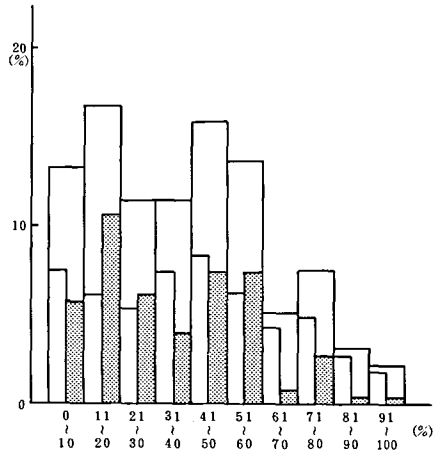

Fig. 11. Distribution of bone loss

(15.8%)，女性でも40歳代(17.5%)で合わせて33.3%となった．

11 付着歯肉の幅の分布に関して

主訴部位の付着歯肉の幅は2.6～3.0 mmが最も多く57名(24.7%)(図10)で男性31名(13.4%)，女性26名(11.3%)となり，年齢では男性40歳代(17.5%)，女性50歳代(22.8%)となり，男女合わせると50歳代(31.6%)が最も多かった．

12 骨吸収度の分布に関して

主訴部位の骨吸収度では16～20%が最も多く，23名(10.1%)(図11)で男性9名(3.9%)，女性14名(6.2%)となり年齢についてみると男性では40歳代(19.0%)，女性でも40歳代(14.3%)の合わせて33.3%で，最も多かった．

13 臨床分類による進行度の分布に関して

臨床分類による進行度では，軽度が最も多く，115名(58.1%)(図12)となり男性58名(29.3%)，女性57名(28.8%)であった．年齢についてみると男性では40歳代(8.6%)，女性では40歳代，50歳代(8.6%)が最も多く，男女合わせると40歳代(17.2%)が多かった．

14 初期治療としての処置内容による分布

当科では初期治療として大多数の患者は歯石除去，刷掃指導を受けており，それらを除いての処置について最も多かったのは暫間固定の78名

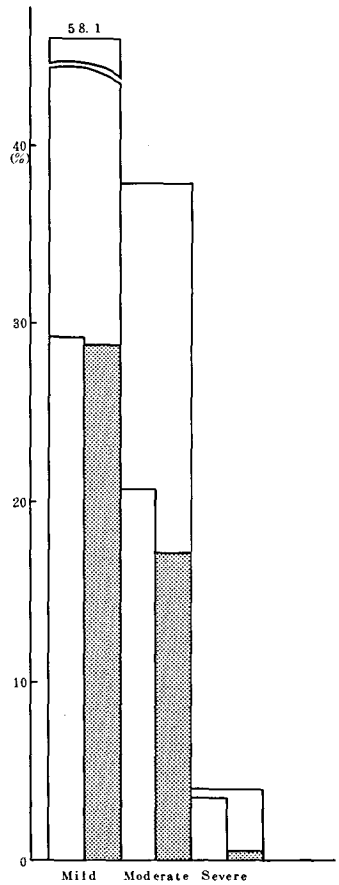

Fig. 12. Distribution of diagnosis

（31.0%）（図3）で男性40名（15.9%），女性38名（15.1%）となった．

年齢についてみると男性では50歳代（17.9%），女性でも50歳代（19.2%）が多く合わせて37.1%という結果となった．

考　察

来院した歯周病患者の構成は40歳代，50歳代，30歳代の順で多く，第2報と同じ結果となりピークは40歳代であった．又，第一報[1]，第二報[2]においては20歳代の患者が60歳代の患者数を上回っていたのに対し今回は60歳代の患者数を上回っていた．来院の月別では，10月，9月の順で女性の患者が男性より多く，年齢では50歳代が多かった．主訴についてみると，違和感，出血の順に多くこれは第二報の結果と同じで，違和感については30歳代の男性，出血では40歳代の女性に多くみられた．初診時P.C.R.では61～65%が最も多かったが第二報のP.C.R.81～85%と比較するとやや良好ではあるが依然として初診時における口腔内清掃状態は不良であると思われる．中にはP.C.R.20%以下という患者は14名で第一報[1]，第二報[2]のそれより多数であった．主訴部位については第一[1]，二報[2]同様上下顎前歯部に多く主訴との関係をみると上顎前歯部では動揺，出血が多く，下顎前歯部では動揺が多く見られた．

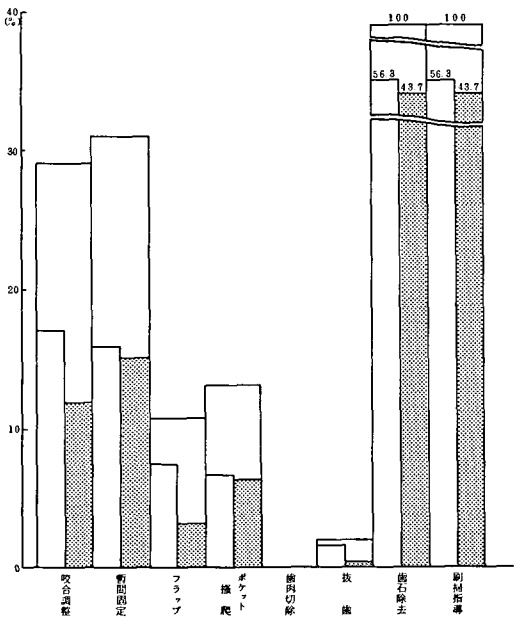

Fig. 13. Distribution of treatment

G.I.については第一[1]，二報[2]のG.I.3に対し今回G.I.2が多く，P.I.では第一報[1]同様P.I.1に多く，C.I.については第一[1]，二報[2]のC.I.2に対しC.I.1が多い結果となった．又，G.I.2，P.I.1，C.I.1という結果は30歳代に多い傾向がみられた．

動揺度については第二[2]報と同じく動揺度1度に多く40歳代に多くみられた．ポケットの深さは第一[1]，二報[2]の4.0 mmに対し今回は3.0 mmが多く40歳代に多かった．付着歯肉幅は第二報[2]同様で2.6～3.0 mmが多く50歳代の女性に多くみられた．骨吸収度については第一[1]，二報[2]では46～50%に多かったが，今回最も多かったのは16～20%で，次に多かったのは46～50%であった．骨吸収度16～20%では40歳代，46～50%では50歳代に多くみられた．臨床分類による進行度では第二報[2]同様に男女共軽度が多く，40歳代に多くみられた．又，軽度においては女性が，中等度，重度においては男性の占める割合が多い傾向にあった．処置内容は初期治療としての歯石除去，刷掃指導を除いて最も多かったのは，第一[1]，二報[2]と同様で，暫間固定が多く次いで咬合調整の順となった．以上よりP.I.については第一報[1]と同様，年齢，主訴，動揺度，付着歯肉の幅，臨床分類による進行度については第二報[2]と同様，主訴部位，処置内容については第一[1]，二報[2]と同様の結果となり，来院月，P.C.R.，G.I.，C.I.，ポケットの深さ，骨吸収については第一，二報とは異なった結果となった．P.C.R.，G.I.，P.I.，C.I.，ポケットの深さ，骨吸収度においては第一[1]，二報[2]より小さい値を示し比較的軽度の段階での来院が多かったという考察結果を得た．

結　論

今回の報告及び第一[1]，二報[2]との結果を含め総括としての結論は，昭和53年1月から昭和60年12月までの間に松本歯科大学病院歯周病科に来院した912名（男性556名，女性356名）を対象として，主訴，初診時P.C.R.，主訴部位，臨床所見としてのG.I.，P.I.，C.I.，動揺度，ポケットの深さ，付着歯肉の幅，骨吸収度，臨床分類による進行度，処置内容について統計的に検討し次の結果を得た．

1．来院患者は10月及び3月に多く40歳代の男性に多い．

2．主訴は違和感で主訴部位は上下顎前歯部に集中しておりその部位では，G.I. 3，P.I. 2，C.I. 2，動揺度1度という状態が多かった．

3．初診時P.C.R.は71～80%が多く口腔清掃状態は不良であった．

4．ポケットの深さは4.0mm，付着歯肉の幅は2.1 mm～3.0 mm，骨吸収度は41～50%という状態が多かった．

5．臨床分類による歯周病の進行度では軽度が多かった．

6．処置内容では初期治療としての歯石除去，刷掃指導を除いて暫間固定，咬合調整が多く，40歳代に多かった．

文　献

1）金山奎二，宇都宮淳，樽井邦博，伊藤茂樹，塩谷清一，小沢嘉彦，太田紀雄（1986）歯周病患者の統計的観察．第一報　初診時の主訴とその処置についての検討．松本歯学，12：322—328

2）金山奎二，宇都宮淳，樽井邦博，伊藤茂樹，塩谷清一，小沢嘉彦，太田紀雄（1986）歯周病患者の統計的観察，第二報　初診時の主訴とその処置についての検討．松本歯学，13．投稿中．

3）O'Leary, T. J., Drake, R. B. and Naylor, J. E. (1972) The plaque control record. J. Periodontol. **43**: 38.

4）Löe, H. (1967) The Gingival Index, the Plaque Index and the Retention Index Systems. J. Periodontol. **38**: 610—616.

5）Silness, P. and Löe, H. (1964) Periodontal disease in pregnancy, II. Correlation between oral hygiene and periodontal condition. Acta Odont. Scand. **22**: 121—135.

6）Green. J. C. and Vermillion, J. R. (1960) The oral hygiene index; A method for classifing oral hygiene status. J. American Dent. Ass. **61**: 172—179.

7）Schei, O., Waerhaug, J., Lovdal, A. and Arno, A (1959) Alveolar bone loss as related to oral hygiene and age. J. Periodontol. **30**: 7—16.